

〈コラム〉勝海舟墓石の碑銘は誰が書いた？

星川 礼応

### 1 海舟墓石の字は徳川慶喜筆？

現在、洗足池の畔には、勝海舟と夫人・民の五輪塔の形をした墓が並んでいる。この地（古くは千束村といった）と海舟との間にあった江戸無血開城以来の因縁や、別荘「洗足軒」の造営の経緯、明治32（1899）年1月19日に亡くなった後、生前の意思により洗足池畔に埋葬されたことや、昭和に入り民夫人（明治38年没）の墓が青山墓地から現在地に移築されたことなど、細かい経緯について今回は割愛する。大概是、既に常設展や当館図録等でも詳記しているので、そちらを参照して欲しい。

今回取り上げたいのは、海舟墓石の水輪(1)に刻まれた「海舟」の字についてである。



一見、何の変哲もない二文字だが、旧来この字は、かつての江戸幕府第15代将軍・徳川慶喜が書いたものとする説が提唱されてきた(2)。

しかし、この通説は資料的根拠が薄く、同時代資料に基づく裏付けも行われてこなかった。また、実際に墓石の文字を見ると、慶喜の筆跡とは異なる印象を受ける。

そんな中、最近の資料調査によって、この問題に終止符を打つ資料の存在が明らかとなった。早速報告しよう。

## 2 通説の出所と再検証 ～「徳川家達筆」の可能性～

資料を見る前に、「海舟墓所の二字は慶喜筆」とする通説がどのように発生してきたかについて確認しておきたい。管見の限り、その出所と思しき最古の記述は、海舟の知友で自身も旧旗本であった戸川残花とがわざんか（安宅やすいえ）が著した『海舟先生』<sup>(3)</sup>の中に見出される。曰く、「（海舟）先生の遺骸は、一月廿五日、東京府下荏原郡馬込村千束池畔ふかえぼらぐんに葬り、今は徳川公爵が書かれた『勝海舟』の三字<sup>(4)</sup>が、碑石の表に残り、折々有志の人の参拝するのみである」と。ここから、「徳川公爵」が海舟墓石の碑銘を書いたことが窺える。

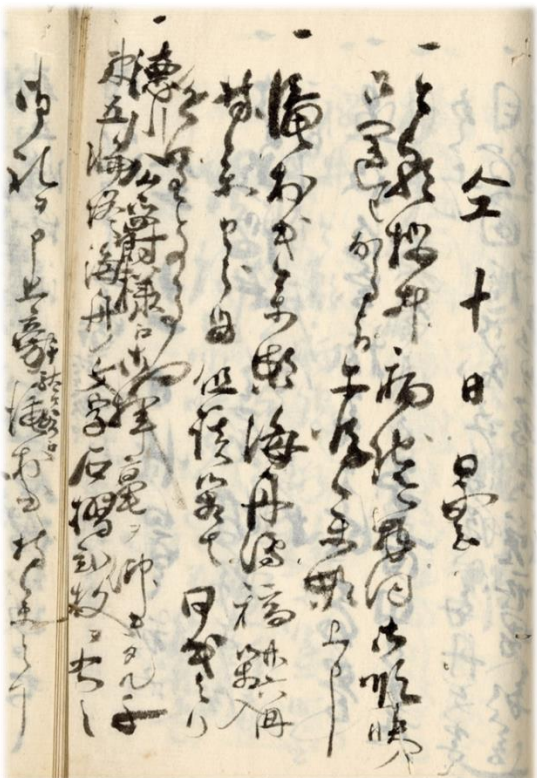
では、これを直ちに慶喜とすることが出来るかという点、否である。『海舟先生』が刊行された明治43年当時、「徳川公爵」は2人存在した。すなわち、慶喜と徳川宗家の当主、家達である。これにより、2通りの人物比定が可能そうに思えるかもしれない。しかし、家達が明治17（1884）年7月に明治政府から公爵に叙されているのに対し、慶喜の受爵は明治35年6月であった。つまり、海舟が死去した明治32年当時の「徳川公爵」は、紛れもなく家達ただ1人なのである。また、同書中の海舟死去当日（明治32年1月19日）に関する叙述<sup>(5)</sup>に注目すると「十九日の中夜には前將軍家慶喜公、今の公爵徳川三位家達公の親しく問はせ玉ふあり」とあり、戸川が依然として慶喜を「徳川公爵」ではなく「前將軍家」と記していることが明らかである。ここから、戸川が海舟墓石の字を書いたとする「徳川公爵」は、慶喜ではなく、家達を指していると思ふのが妥当ではないかと思われるのである<sup>(6)</sup>。

## 3 『勝伯爵家執事日誌』に見る真相

以上を踏まえて、資料に基づき「海舟墓所の二字を誰が書いたか」問題を解き明かして

いこう。明治32年1月19日の海舟の死を境に、勝伯爵家では『執事日誌』が書き残されるようになった。その中に、墓所造営に関することも記録されている。早速、その中から一ヶ所を抜粋して見てみよう。

〔資料〕『勝伯爵家執事日誌』明治32年11月10日条



全十日 曇

- 一、今朝桜井病院へ拝伺、御順快ノ御運ヒなる旨、午後参邸上申候、
- 一、滝村氏参邸、海舟傳稿（廿六冊、箱入）持参セらる、但該箱者同氏より進呈との事也、
- 一、徳川公爵様江御揮毫ヲ仰キタル、千束五輪塔海舟ノ文字、石摺式枚ヲ右之御礼ヲ申上旁、千駄ヶ谷江滝村氏持参之事、  
(後欠)

右は、海舟の死から約10ヶ月後の明治32年11月10日の勝伯爵家執事が書いた日誌である。勝家執事の一人である桜井貞が、当時病氣療養中だった勝伯爵家第2代当主である精（徳川慶喜10男、海舟の養嗣子）の見舞いに行ったことや、徳川宗家の家扶で旧幕府時代は勘定方や奥右筆等を歴任した滝村小太郎（鶴雄）<sup>たきむら ことろう</sup>が、自著である『海舟伝稿』<sup>つるお</sup>全26冊を箱に入れて勝家に持参したことが見える。

その後の傍線部に注目して欲しい。「徳川公爵様に執筆をお願いした、千束五輪塔（海

舟墓石)の海舟の文字について、石摺(拓本)2枚を作り、御札として滝村が千駄ヶ谷に持参する事」とある。千駄ヶ谷には、明治10年10月以来、徳川家達の本邸があった。この一文から、海舟墓石に彫られた「海舟」の二文字が、家達の筆によるものであり、慶喜の筆ではないことが裏付けられるのである。

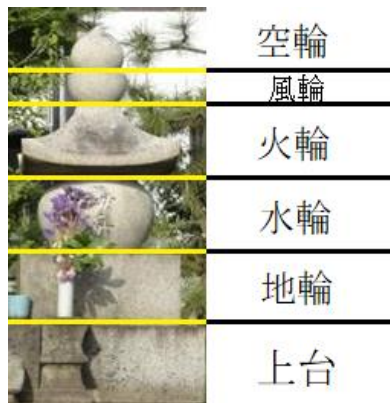
ついでに、この少し前から遡って見てみると、海舟墓石は1月の埋葬時には造られていなかったことや、墓域の造成の一環として楓や紅葉の植樹が先行して進められていたことが分かる。墓石の設計が協議され始めたのは4月末から5月初頭になってからのことであった。6月13日には、海舟門下の富田鉄之助とみたてつすけと、徳川宗家の家扶である滝村が「御生前御肉筆(7)ニ似せ製造相成候旨(海舟が生前に描いた肉筆の図に似せて墓石を製造する)」との方針を定め、7月に見積り、その後製作へと進む(墓石の製作は青山神葬地の石工いしく・鈴木猛麟すずきもうりんが担当した)。因みに、9月28日には「御石碑刻方」の見分が行われているので、勝家側が家達に墓石に刻む「海舟」の揮毫を依頼したのはこれ以前のことだろう。或いは、7月23日条で家達の家扶である滝村が「千束御石碑」の件で赤坂氷川邸に来ているから、この辺りで話がまとまったのかもしれない。その後、明治32年11月5日に工事は竣工し、海舟墓所に五輪塔が建てられた。なお家達は、後に自ら洗足池を訪れて海舟の墓参りを行っている(8)。

#### 4 おわりに

以上により、勝海舟墓石の「海舟」の二字は徳川家達筆であったことが明らかとなった。6歳で徳川宗家を継いで以来、三十余年にわたり海舟から世話になった家達は、墓石に筆跡を寄せることでその恩に報いようとしたと思われる。

慶喜の関与が認められなかったとはいえ、海舟の墓所造営に徳川家が関わっていたことについて、資料的根拠が得られたことは大きい。海舟墓所は、洗足池畔に唯一残る徳川・勝両家のつながりを示す遺蹟として、当地域において重要な意義を持つと言えよう。

1 水輪は、五輪塔の一部分の名称である（左図参照）。



2 野村義治「勝海舟と千束」『史誌 大田区史研究』17、大田区史編さん室、1982年、墨田区教育委員会編『勝海舟 両国生まれの幕臣』（同、2014年）ほか。

3 戸川残花「八十」千束池畔」（同『海舟先生』成功雜誌社、1910年 125頁）

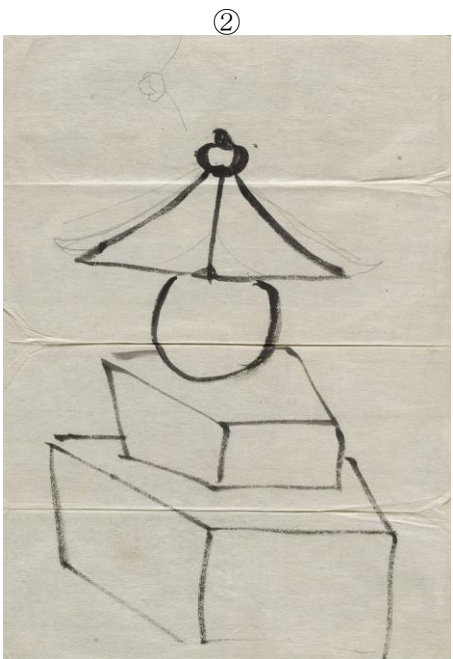
4 大正期に撮影された海舟墓所の写真（大田区立郷土博物館蔵）を見る限り、海舟墓石の水輪の字は明らかに「海舟」の二字である（左）。よって、これは戸川残花の記憶違いであろう。



5 戸川残花「七十九」墓去」第二（註3前掲書、118〜119頁）

6 これについては、「大田区に伝わる勝海舟・西郷隆盛の足跡」『月刊おとなりさん』2019年2月号、のち西村敏康編『月刊おとなりさん 勝海舟×西郷どん』（株式会社ハーツ&マインズ、2019年）に採録、同著111頁）にも記載されている。

7 ここでいう「海舟」御肉筆」が何を指しているか特定することは難しいが、当館が所蔵している五輪塔図面（左）を指している可能性は残る。



特に①は、封筒の表書から墓石設計時のものである可能性が高く、富田と滝村が参考にした「御肉筆」である蓋然性は高いと思われる。

これに関連して、海舟が還暦を過ぎた明治16（1883）年に墓石の図案を描いたという話が伝わる。これによると、但馬の牧田探源を来客に迎えた海舟は、紙を延べて即興で墓石の絵を描き、

「呼天號地、四大茫茫、我去何之、霧消清虚月一輪、

十六年予歳六十一、頑劣無成、而空老朽、不知何処土化骸、偶作此図、以代墓碣」

との賛を図上に据えたという（水魚庵編『海舟百話』、富士書店、明治32年5月）。海舟没後、この絵は軸装され、洗足軒の床の間に飾られた（『同方会報告 第拾参號』明治32年12月）。

以上を踏まえて図案①②を見ると、①には賛の一部（傍線部）が書かれている。おそらく海舟は、洗足軒に掲げられた絵図を含めて大量の墓石図を描き、①②はその内の下書きに当たるものだろう。

8 『勝伯爵家執事日誌』明治38（1905）年1月21日条、大正10（1921）年1月19日条。